安藝杏一　三浦鍋太郎
近　新三郎　永田兵三郎
高橋逸夫　校閲

# 田邊朔郎博士六十年史

西川正治郎編

名著100選図書
56. 9. 3

| | |
|---|---|
| 登録 | 昭和　年　月　日 |
| 番号 | 第　24544　号 |
| 社団法人 | 土木学会 |
| 附属 | 土木図書館 |

還暦の田邊朔郎博士

謹んで本書を

恩師田邊朔郎博士に獻ず

大正十二年八月

安藝杏一

三浦鍋太郎

近新三郎

永田兵三郎

高橋逸夫

# 序

明治大正の聖代、英雄賢才、陸續として現はれ、名を竹帛に垂るべきもの、枚擧に遑あらずと雖も、然もその傳記の世に出づるもの甚だ多からず。蓋し傳記なるものは實に偉人の功績を後昆に傳ふると共に、その偉大をして後人を感奮啓發せしむるたるや論を俟たざるなり。是によつて之を觀れば、その編纂の業たる甚だ意義ありと謂はざるべからず。

恩師工學博士田邊朔郎先生は、我が土木工學の泰斗にして、又我が工業界の先覺者なり。東西兩帝國大學に職を奉ぜらるゝこと前後三十年、其の間深宏の學識と、超邁の人格とにより、後進を扶掖せられ、其の門に出づる者千を以つて數ふるに至る。然も先生資性溫厚、情誼に厚し。因つて其の門に學び、一度先生の馨咳に接したる者は、皆今尙慈父の思を爲す。先生の德、それ豈偉ならずとせんや。

而して、又先生は、その蘊奧を實地に施して、社會を利せられたる所尠からず。就中先生の名を世界的ならしめし大事業は、琵琶湖疏水工事これなり。當時我が國の工業は未だ微々として振はず、官廳は各々外國技師を聘してその指導を受けたるの秋に

於いて、先生は未だ二十有三歳の青年にして、單身其の測量設計に從事し、各方面の所謂識者の杞憂を排し、遂に數年にしてその成功を見、先進諸國をして驚歎措く能はざらしめ、外國威を發揚し、內國富の基を鞏うせしを始め、其の他或は北海道に鐵道を敷設して、文化を未開の荒蕪に導き、或は獨身西比利亞に入り、千辛萬苦その運輸交通の實狀を明かにし、國家に資する所頗る大なりしが如き、その偉業、擧げて數ふべからざる也。

曩に先生華甲の齡を迎へらるゝに當り、幾多の門下知己相集りて、爲に大いに祝賀する所あり。余等自ら揣らず、更に又此の機會に先生の六十年史を編せんと欲し、資料蒐集の事に從ふ。而して之が整理編纂及び執筆に關しては、平素の業務自ら文辭に慣れざるを以つて、擧げて一切を西川正治郎氏に託せり。卽ち今や稿成りて、これを恩師の膝下に獻ずるを得るは余等の甚だ欣幸とする所ならずんばあらず。

それ傳記は、啻に個人の事績を傳するに止らずして、その人を中心としたる當時の文化を語るものといふを憚らず。此の意味に於いて傳記は、狹き範圍に於ける一箇の文化史なりといふを得べし。況んや先生の如き幾多著大の功業を確立し、邦家文運の作興に關與するところ深甚なるに於いてをや。本書にして、幸に先生の事業の全

般を社會に周知せしめ、又これによりて後進子弟の奮發努力に資するを得ば余等の望は卽ち達す。然も此の小編の未だ盡さゞる點は、冀くば幾多の門下生諸君の中、更に他日を期して、精細完備せる傳記を編述し、先生の名と德とを稱へられんことを。余年長の故を以つて、校閲者を代表し一言以つて序となす。

大正十二年八月

工學博士　安藝杏一謹識

# 緒言

一、工學博士田邊朔郎先生の還曆祝賀記念のため、先生の傳記を執筆せむことを門下の有志より望まれたのは、大正十一年十二月中旬のことである。顧れば、私が初めて先生の知を忝うせしはこれより七年前、卽ち大正五年、先生が京都帝國大學に於いて工科大學長に補せられたる際であつた。私は當時(現在も)大阪毎日新聞社京都支局員として所謂大學係を擔任し、其の關係上屢々學長室を訪づれて先生の馨咳に接した。私は元來京都の產であるので、少年時代より疏水インクラインを見、また小學校の修學旅行にも大津京都間の疏水隧道を舟遊し、此の驚くべき日本最初の大工事を完成せられし偉人の名は夙に耳に熟して居た。然るにこゝに、目のあたり其の風乎を仰ぎ親しく其の動靜を傳ふるの任務に服せしは、私として大なる欣びであることは謂ふまでもない。

二、先生が學長を辭して、專ら研究室に居らるゝやうになつた後も、私はよく先生に引見を乞うた。彼の鐵道其の他殉職者の弔慰のために、先生の建設せられむとする英靈塔の工事や、淀川改修問題や、都市計畫上の施設や、其の他新聞に現はれたる先生關

係の記事は大概私のインタービューによつて先生より得たものである。先生はまた私の請に委せて、疏水竣工當時の舊作をものして與へられた。其の詩は次の如くである。

開成防水初無疑、憶起黑風驚夢時、
點滴遶簷如皷瑟、七年夜雨不曾知。

程なく、この書は表裝の上、貧弱な私の書齋の床に掲げられ、今に私をして、偉人功業の用意の尋常ならざるを感せしめて居る。

三、爾後數年、端なくも右の囑託を蒙つたのは、まことに、私の意外としたことである、と同時に、また甚だ光榮とせねばならぬところであつた。併しながら偉人を傳ふるは凡庸私の如き徒の任ではない。先生の傳記を編むの要あらば、もとより他にその人があるであらうと、私が固辭して受けなかつたのは、私として、蓋し止むを得ざるに出づるものであつた。然も有志の方々の勸奬の急なる、私をして辭を飜へすの外なからしめ、遂に先生に對して、甘んじて斯くは不遜の罪を負ふに至つた次第である。

四、先生の傳記を、私が執筆するに至つた事情は右の通である。而して、傳記に要する材料は、殆んど其の大部分を、彼の疏水工事時代の夜學に通つて直接先生の敎を受け、

以來三十餘年の久しき、先生の指導の下にある小西得太郎氏より得た。氏は先生の事業的方面、及び一般公生活より日常の事に亙り、細大漏さず、資料とすべきものを集めて居られた。私はそれを申しうけて、整理する傍、一方先生の各著述論說を涉獵し、其の學說並びに事績に關し疑を存する點は、先生に接して敎示を仰ぐ等、最初一二ヶ月は斯樣な準備的用務に費さゞるを得なかつた。

五、材料の蒐集と整理が終つて後は、これが叙述に關する構想に從ひ、愈私が六十年史としての順序を立てゝ、執筆したのは本年三月初旬である。何分本職が新聞社にあるので普通業務に差支へなき夜間をこれに當てたけれども、それでも、運筆の時間を得るに可成り困難を感じた。而して困難を感ずるごとに想起せらるゝは、先生が疏水工事時代の颯爽たる英姿に外ならない。あゝ七年夜雨不曾知。この意氣込を以つてすれば、私の努力は物の數にも足らぬ。斯く思うて宵より机に對ひ、我を忘れて曉に達し、意外の白むに驚かされたことは稀でなかつた。斯くして五月下旬に至つて草稿全く成り、或は推敲し、或は全然稿を改冊し、一章又一章、筆を擱くに從うて人をして淨書せしめ、七月末日に至つてこれまた完結を告げたのである。

六、併しながら、勿論私はこれを以つて充分とするものではない。全體の布置に就い

て、果して妥當なるを得たりや否や。叙述の方法に、繁簡其の宜しきを失せざるや否や。章句の未熟、措辭の生硬、現に自ら安んずる能はざるもの多々あるのみならず、殊に其の專門學に通せざる私として、縱に先生が六十年史の名を冠せる如き、轉た赧然たらざるを得ない。然も、徒らに扭捏として本稿を長く机上に堆積せしめ置くは、門下の有志が先生に對し、獻本の機を失するの恐れがあるので、取り敢へず一應校閲擔當の方々の手許に送るに決した。即ち校閲は、本書の執筆を私に依頼せられた左記五氏によつて行はれ、史實の方面に關しては、其の正鵠を得たるものなることを確められたのである。故に本書は構想の不備、文章の蕪雜、修辭の杜撰はこれ有つて、皆私の責に歸すべきも、其の取材の確實は大いに誇とするところであらねばならぬ。

東京帝國大學教授時代　安藝杏一
北海道鐵道時代　三浦鍋太郎
京都市三大事業關係時代　永田兵三郎
京都帝國大學教授時代　高橋逸夫
京都府關係時代　近新三郎

七、本書には先生を呼ぶに學位を以つてせる外、叙事には概ね敬稱を用ふるを避けた。これは着筆上私が當然とするところのヒストリオグラハァーとしての公の態に倣ふたからであるは申すまでもない。ために、先生を始め關係諸賢に禮を失するなきを保せぬが、此の點は幾重にも諒恕を賜はりたいと思ふ。なほ終りに、本書の編纂に對して參考書を提供し、又は諸種の助力を與へられたる京都帝國大學圖書館司書笹岡民次郎氏並に文學士鈴鹿三七氏に深謝の意を表する。

大正十二年七月末日百子居文庫にて

編者　西川正治郎謹記

# 田邊朔郎博士六十年史目次

## 第一編


第一章　緒言……一—八頁

第二章　家系及び一族……九—一五

一、博士の家系……九

二、博士の父祖……一〇

三、博士の父及び親屬……一二

第三章　博士の幼少年時代……一六—二七

一、博士の生れたる時代……一六

二、博士の母と家庭……一七

三、戊辰事變の災厄……一九

四、一家流浪中の逸事……二〇
五、博士立志の一動機……二四
第四章　博士の青年時代……二八—四四
一、岩倉大使一行の外遊……二八
二、我國工業教育制度の確立……三六
三、工部大學に學ぶ……三九
四、苦心の卒業論文……四一

# 第二編

第一章　琵琶湖疏水工事時代(上)……四七—七三
一、疏水の事業的學術的意味……四七
二、工事實測の出發點……五六
三、工事に對する各方面の反對……五九

第二章　琵琶湖疏水工事時代(中)……七四—八六
一、機械、材料、人の缺乏……七四
二、國民的能力の試金石……七九
三、注目すべき竪坑工事……八〇
四、工事の進行と遭難……八五
第三章　琵琶湖疏水工時事代(下)……八七—一〇七
一、米國水電事業視察……八七
二、水電事業と疏水工事新計畫……九一
三、竣工式と工事成績……九七
第四章　疏水工事の文獻其他……一〇八—一二四
一、英國新聞紙の報道……一〇八
二、歐米諸國の賞賛……一二三
三、政府人民の無知無識……一二八

四、博士當年の心事……一二一

# 第三編

## 第一章　東京帝國大學教授時代……一二七—一四七

一、日清戰後の國策……一二七
二、博士の結婚……一三六
三、東京帝國大學教授に任ず……一三〇
四、鴨川運河工事……一三二
五、本願寺防火水道敷設前後……一三七
六、水電調査と鐵筋混凝土研究……一四〇
七、工科大學に於ける聽講者……一四一
八、日本木材の强弱試驗……一四四
九、母堂逝去と子息出生……一四七

## 第二章　北海道鐵道敷設時代(上)……一四八—一七三

一、北海道開發と鐵道事業……一四八
二、北海道の三大恩人……一四九
三、踏査測量上の艱苦……一五一
四、鐵道敷設案の三大難關……一五六
五、第一期線豫算案の運命……一五九
六、井上藏相を說破す……一六六
第三章　北海道鐵道敷設時代(下)……一七四—一九六
一、鐵道敷設及び創業の多難……一七四
二、博士考案の自働聯結機……一七八
三、拓殖政策上の見地……一八一
四、在職前後七年間……一八三
五、鐵道敷設上の卓見……一八七
六、鐵道記念塔の計畫……一九三

# 第四編

第一章　西伯利鐵道調査前記……一九九—二〇四
一、博士西伯利旅行の眞相……一九九
二、露國の極東侵略史回顧……二〇一
三、西伯利鐵道工事概觀……二〇三
第二章　西伯利鐵道調査時代(上)……二〇五—二三三
一、西伯利鐵道の學術的調査……二〇五
二、博士調査旅行中の辛苦……二〇五
三、博士當年の旅行日記……二〇七
四、博士露國に滯留す……二二四
五、博士の調査と我が對露政策……二二五
六、東清鐵道副社長と會見す……二二七
第三章　西伯利鐵道調査時代(下)……二三四—二四五
一、恩師ダイヤー氏を訪ふ……二三四

二、明治工業史編纂計畫成る……二四〇
三、博士の西伯利鐵道調査結論……二四二

# 第五編

第一章　京都市三大事業の調査……二四九―二六三
一、疏水工事竣成後の好況……二四九
二、第二疏水工事の要望……二五八
三、工事前後の經緯……二六〇
第二章　市三大事業完成の効績……二六四―二八八
一、市三大事業に對する貢献……二六四
二、事業完成の記念及び祝賀……二七八
第三章　京都市三大事業雜纂……二八九―二九六
一、六十年史外の追加……二八九

二、英皇儲殿下の京都帝國大學台臨……二九〇
三、市三大事業十週年記念式……二九三

# 第六編

## 第一章　明治に於ける京都帝國大學教授時代(上)……二九九—三二一

一、軌道撓度振動の研究……二九九
二、列車抵抗力の研究其の他……三〇二
三、京都御所防火水道の施設……三〇六
四、博士の社會的學術的貢献……三一一
五、水底隧道の調査研究……三二二
六、博士の著述と講演其他……三二五

## 第二章　明治に於ける京都帝國大學教授時代(下)……三二二—三三六

一、此の時代の博士の公生活……三二二
二、多祥なりし當年の私生活……三二六

三、石菴先生五十年祭典……三二七
四、蓮舟翁の金婚式を擧ぐ……三二八
第三章　大正に於ける京都帝國大學教授時代（上）……三三七—三五〇
一、宮中と淺からざる御因緣……三三七
二、二重橋鐵橋修補工事……三三九
三、明治天皇御大葬次第……三四一
四、博士第三回目の外遊……三四三
第四章　大正に於ける京都帝國大學教授時代（中）……三五一—三九〇
一、大正年間の諸研究……三五一
二、博士の公的生活……三五五
三、博士の授業を受けし人々……三五八
四、明治工業史の編纂進捗……三六三
五、大正時代の諸著述……三七〇
六、英靈塔創建事業完成近し……三八四

第五章　大正に於ける京都帝國大學教授時代(下)……三九一—四一〇
一、嗣息秀雄氏の夭折……三九一
二、蓮舟翁の逝去其の他……四〇五
三、博士還暦の日を迎ふ……四〇九

# 第七編

第一章　博士の人物……四一三—四三一
一、性格の三大特徴……四一三
二、博士の負けじ魂……四一四
三、精緻綿密の用意……四一九
四、廉潔忠恕の精神……四二三
五、博士の所謂縱横斷法……四二七
第二章　教育家としての博士……四三三—四三六

一、實務家的藝術家的人格……四三三
二、ダイヤー先生と博士……四三四
第三章　博士の詞藻及び技藝……四三七—四六五
一、人格反映の一面……四三七
二、博士の文章……四三七
三、博士の詩歌……四四一
四、趣味多き「石齊石話」……四四四
五、博士の書畫……四五四
六、博士の篆刻……四五七
七、博士の箏曲……四五八
八、博士の作曲「民草」……四六一
第四章　博士の日常生活……四六六—四七二
一、博士の健康……四六六
二、過の愉快を貪らず……四六八

三、寡欲澹白の資……四六九
第五章　終　結……四七三―五〇六
一、博士の還暦祝賀……四七三
二、一大紀功碑建設……四九三
三、結　語……五〇四
附　錄　田邊朔郎博士六十年史年譜　一―三八

# 田邊朔郎博士六十年史挿入印版目次

一、還暦の田邊朔郎博士
二、博士祖父田邊石菴先生。博士嚴堂田邊勿堂先生。博士萱堂ふき子刀自。
三、五歳(慶應二年)の博士。二十三歳(明治十六年)の博士。
四、琵琶湖疏水線路圖及景色寫眞。
五、結婚後一年(明治二十四年)の博士(三十一歳)と博士夫人靜子(二十歳)
六、四十歳(明治三十三年)の博士並に北海道鐵道線路の圖。
七、博士長男秀雄氏(大正三年二十三歳)。及博士揮毫の般若波羅密多心經柘本
八、博士次男主計氏(大正十年二十七歳)。博士三男多聞氏(大正十年二十四歳)。博士四男亮吉氏(大正十年二十二歳)
博士長女とし子(大正十年十九歳)。
九、博士の繪及書。
十、博士の紀功碑並に京都市の圖。